



新作のゴミアート「Let's become garbage! (みんなでゴミになれる!)」から顔を出す作家・淀川テックの2人



ピカソのノスタルジーを主題にした絵(左端)など、横尾忠則さんの新作が並ぶ会場

「郷愁」呼び起こすアート

「郷愁」や「幻想性」をキーワードに、現代アートの魅力に迫る企画展「ノスタルジー&ファンタジー」が国立国際美術館(大阪市北区中之島)で開かれている。西脇市生まれの画家・横尾忠則さんや、明石市出身の彫刻家・棚田康司さんら、若手からベテランまで10組の多彩な作品458点を紹介。高齢化が進む日本社会を背景に、「懐かしさ」の持つ意味などについて考えさせてくれる。(堀井正純)



柄澤齊さんの「決壊(『洪水の後』より)」(1998/2009/2011年・国立国際美術館所蔵)

巨大な「ゴミの壁」に生活の痕跡

30代の若手2人組「淀川テック」は、淀川の河川敷で拾い集めた無数のゴミ、漂流物を素材にした廃材アートで知られる。今回は新作として縦4・55m、横7・28mの巨大な「ゴミの壁」を発表。鑑賞者を驚かせたサッカーボールやキューピー

ちへのノスタルジーとか、自分ではなく他人のノスタルジーにしたかった」と説明する。

棚田さんは、1本のクスノキから彫りだし着色した中性的な少年や少女像を出品。大人と子どもの間で揺れ動き、傷つきやすい魂を抱えた少女らの姿に、過ぎ去った自らの10代を思い出し、重ねる人もいるだろう。

9月15日まで。月曜休館。一般900円。同館 ☎06・6447・4680

大阪・国立国際美術館の企画展

人形、カセットテープ、一世を風靡した家庭用テレビゲーム機…。ゴミからアートの一部となった日用品、娯楽品は懐かしく、もの悲しく、ユーモラスでもある。作品の一部に穴を開け、鑑賞者がそこから顔を出して作品と一体化できる遊びも施してある。「ゴミの気持ち」が味わえるだろうか？

山梨在住のベテラン柄澤齊さんは、墨やアクリルで描いた連作「洪水の後」「黒の劇場」や銅版画で、画面に繊細で夢幻的な小宇宙を展開。鑑賞者は幻想的な絵画に、失われてしまった世界への追憶や、透명한悲しみとも呼ぶべき不思議な感情を呼び起こされる。

一方、故郷の西脇の思い出や幼少期の私的な記憶に触発され、めくるめく異界を描いてきた横尾さんは、大作3点を新たに制作。「ピカソの別れた女た